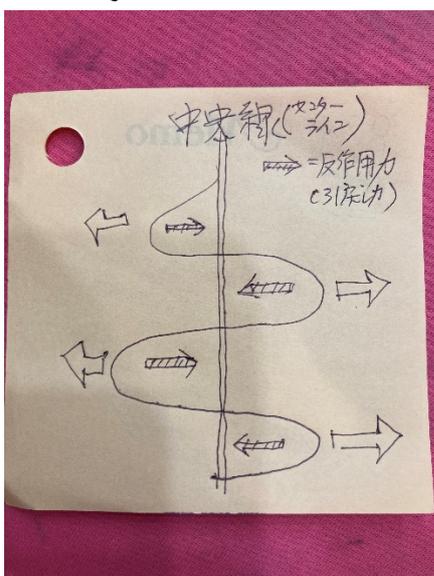


2020/9/23

(うとQ世話し 誤解覚悟で その5 混同してしまったがために) 書庫版



こどもや後輩や部下を教育するのに使うある種の「荒療治」に「愛のムチ」などとしやれた表現を使おうとするから焦点がぼけてしまいます。

はっきり

「愛の往復ビンタ」とか「愛のげんこつ」「愛の、怒鳴りつけ」とか言えばいいのに。

こんな乱暴なことを書くと早速「暴力主義者」「暴力積極論者」「暴力礼賛主義者」等と言われそうですし、そういわれることを恐れて黙ってしまう場合も多いかと思います。しかし、多くの人が自らの経験則に照らし合わせて内心では「確かに、その方が有効な場合もあるよな」と思うこともあるかと思います。

例外的に発せられる「強烈な教育的警告又は指導」即ち相手を育てるために「叱る」行為としてなら。

(因みに暴力は「叱る」にある「相手を育てる」意味合いのまるでない、自分の「怒り」の一方的な「吐き捨て」のことです)

しかしそんなことは口が裂けても言えない。

「暴力」という言葉は「戦争」や「反社会組織」や「家庭内のそれ」を連想させ、それが元で、碌に「現象と意図」の切り分け為の個別精査もせず、十把一からげにされて上記3つの内のどれかのレッテルを貼られてしまうから。

ここに精査不足による思考の飛躍とそれに気づかぬ早すぎる結論、即ち「混同」があるように思います。

ではその「混同」とは何なのか？

「暴力によってしか解決しない」「いかなる状況下に於いても暴力使用」

これが上記の「暴力主義者」「暴力積極論者」「暴力礼賛主義者」の定義とします。

例えばいかなる状況であっても「常に右が正しい」というのが右翼と例えると分かり易いか

もしれません。或いはその反対。

ならば、世の中が過度に右傾化した時に左方向に引っ張る、又は過度に左傾化した時に右方向に引き戻すなど、行き過ぎを是正し中央線に戻す「均衡目的の反作用力」は上述のたとえ話に出てくる右翼や左翼とは全く別物です。

だとするなら先の例の暴力の話も

「言葉による説得が全く無理な場合」や

「時間的余裕が全くない場合」或いは

「有効なインパクト目的でショックによる強力な視野切り替えを促す場合」などに限って相手の過度の油断、即ち

「どうせ、言葉だけだ。聞いたふりをしておこう」

を中央ライン（聞く耳を持たせる）に戻す「均衡目的の反作用力」としてはあるような気がします。

（もし、時間の経過とともに一部是認した均衡目的の反作用力が行き過ぎれば、今度は再び逆に「反作用力の反作用方向（反の反で順方向）」に切り替え戻すわけです。常に同じ方向に進むのではなく、順反をコントロールするわけです）

しかしこの「常に暴力」と「均衡（引き戻し）の為の一時的反作用力」を区別せず、ごっちゃごちゃ、に混同して、精査も碌にせず、思考の飛躍と早すぎる結論を出してしまったために、若い人に舐められても黙るしかなくなり、ひいては見て見ぬ振りをする大人ばかりになってしまい、その結果、若い人は益々大人をなめてかかるようになってしまった様な気がします。

「だれも止めないし誰も叱らない。だから何がいいのか悪いのかよくわからない」まま育ち、大人たちはその前で意思の不疎通から生じる不安、恐怖と身構えにより、益々沈黙し元気をなくす。

そしてタダ見て見ぬ振りのご機嫌取りや、その反対に切れて「本当の暴力」を振るうようになる。

簡単に言えば「止めどない悪循環」が、この切り分けをしないままの手抜きによる「十把一絡げの混同」により起こっているような気がしております。